

日本人英語学習者による英語の形容詞・名詞コロケーションの理解における母語の影響[†]

野地 美幸*・岸田 真理子**

(平成28年3月8日受付；平成28年6月7日受理)

要 旨

本研究は、大人の日本人学習者の英語の形容詞・名詞（AN）コロケーションの理解が母語（L1）により影響を受けるかどうか、そしてまた英語熟達度と相関を示すかどうかを調べた。容認可能性判断タスクと英語熟達度テストを実施した結果、英語学習者は、母語話者とは異なり、日本語と一致しないANコロケーションの容認と日本語と一致するAN非コロケーション（すなわち、不自然なAN結合）の排除に大きな困難を示した。更に、個々に容認度にばらつきも見られるが、不一致ANコロケーションの結果と英語熟達度との間に有意な正の相関が見られた。これらの知見から、日本人英語学習者のANコロケーションの理解にはL1の影響がみられること、またその一部は熟達度と相関があることが示唆された。

KEY WORDS

adjective noun collocation 形容詞・名詞コロケーション L1 influence 母語の影響
L1 Japanese L1日本語 L2 English L2英語
comprehension 理解 English proficiency 英語熟達度

1 はじめに

近藤・松谷（2013）のコーパス研究の結果によると、英語のpowerful/strong/intense は日本語では皆「強い」と訳すことのできる類義語であるが、共起し易い名詞は異なっている。powerful man/strong manは頻度の高い表現であるのに対して、intense manの頻度は低い。また、teaと共起し易いのはstrongであるが、アメリカ英語とイギリス英語でも異なり、イギリス英語でより顕著となる。コロケーションは、自由に組み合わせ可能なものとしてではなく「まとまりのある統一体（integral whole）」として学ぶべき語の連続体であるとされ（Parmer, 1933, pp. 7-8）、ANコロケーションも言語（あるいは方言）によって異なる。母語（L1）が日本語の学習者にとって英語のコロケーションの習得は、実際の英語の使用場面で語と語をどう繋げて意味のやり取りをするのかに関わってくる切実な課題である。

第二言語（L2）習得研究の中でもコロケーションは重要な研究課題の一つであり、L2のコロケーションの知識の発達に関しては、学習者と母語話者はどう異なるのか、また、学習者はどこで誤り、その誤りはなぜ起こるのかといった様々な問題について研究が行われている（最近の研究の概観に関してはHenriksen, 2013を参照）。また、こうしたL2学習者のコロケーションの知識の発達の問題に大きく関与しうるものとしてL1の影響が取り沙汰されている（Koya, 2005; 小屋, 2012; Nesselhauf, 2003; Phoocharoensil, 2013）。

日本人英語学習者に関しても近年様々な実証的研究やコーパス研究が行われ、L1日本語が英語のコロケーション習得に与える影響について具体的な姿が少しずつ明らかになってきている（掘, 2009; Koya, 2005; Kurosaki, 2012, 2011; Murao, 2004; Yamashita & Jiang, 2010）。Murao（2004）とKoya（2005）はどちらも英語の動詞・名詞（VN）コロケーションの習得について実証的に調べたもので、互いに一致する興味深い結果を提示している。Murao（2004）は容認可能性判断タスクを用いた実験の結果、日本人学習者は、英語母語話者とは異なり、日本語に直訳できない英語のコロケーションと、（直訳すると）日本語のコロケーションで英語としては不自然なVN結合の2種類の正答率が低かったことを報告している。また、上位群で正答率の上昇がみられたが、この2種類のVN結合に関しては上位群でもなお英語母語話者より著しく正答率が低い結果となったことを報告している。Koya（2005）は、理解と産出の両面で、日本語に対応するものがない英語のコロケーションの方が対応するものがある英語のコロケー

*人文・社会教育学系 **小千谷市立東小千谷中学校

[†]本稿は、岸田が2013年1月に上越教育大学大学院に提出した修士論文（岸田, 2013）を大幅に加筆・修正したものである。

ションより習得が困難であったと報告している。また、学習者の語彙サイズが大きいとコロケーションの知識の増大も見られたが、make a point ofのように、語彙サイズが大きいグループが小さいグループより必ずしも優れているとは言えないものもあったとしている。更に、語彙サイズの小さい学習者よりも語彙サイズの比較的大きい学習者の方にL1の影響が顕著に現れたと報告し、L1の影響と語彙力との関連も明らかにしている。また、最近では、掘(2011)が、中高生の英作文を基にしたJEFLLコーパスから(have a dream, もしくはdreamではなくて) see a bad dream, (discuss this situationではなくて) discuss about this situationといった誤用の具体例を示し、L1の影響という可能性を示唆している。

形容詞・名詞(AN)コロケーションに関しては、Yamashita and Jiang (2010)がVNコロケーションと共にL1の影響を調べている。容認性判断タスクの結果、EFLかESLかの違いもあるが、どちらの学習者も日本語と一致しない英語のコロケーションの方が一致する英語のコロケーションより誤りが多く、反応時間が長かったことを報告している。また、Kurosaki (2012)は、2種類のVNコロケーション、ANコロケーション、副詞・形容詞コロケーションの理解と産出について調べ、ANコロケーションについては日本人学習者の方がフランス人学習者よりL1の影響が著しく、必ずしも正用に結びついていないという考察を行っている。Kasahara and Koizumi (2012)は、(頻度が異なる2種類のANコロケーションもしくは名詞・名詞(NN)コロケーションを選択する)コロケーション・テストと熟達度テストを実施し、両テストの得点に有意な正の相関が見られたことから、コロケーションの知識が英語熟達度を測る上で重要な指標になると述べている。

以上、日本人学習者の英語のコロケーションの習得におけるL1の影響と語彙力・熟達度について概観してきた。簡単にまとめると、コロケーションの種類としてはVNコロケーションに研究の比重が置かれてきたこと、日本語と英語が一致しない場合、一致する場合と比べてコロケーションの獲得がより困難であり、L1日本語の影響が示唆されていること、そしてまた、コロケーションの知識は(個々のコロケーションによっても状況に違いは見られるが)学習者の語彙力・熟達度が上がると一般に増大するが、日本語と英語が一致しないコロケーションに関しては、上級者で熟達度が上がっても母語話者とはかなり異なること、が判明したと言えるであろう。

一方、課題としては、まず、VN以外のコロケーションに関しても更に実証的研究を積み重ねていく必要があるであろう。一口にコロケーションと言っても問題となる語と語の結び付きは性質がかなり異なっており、動詞とその目的語の結合は統語的・意味的選択関係で、また形容詞と名詞の結合は修飾関係で結びついている。L2英語のコロケーションにおけるL1の影響を調べる上でも区別が必要であろう。日本人英語学習者のANコロケーションの習得に関して、先行研究ではL1の影響が示唆されているが、VNとANコロケーションの結果が別個に示されていない、あるいは個別のコロケーション毎に結果が示されているので、ANコロケーションの習得におけるL1の影響については更に掘り下げて詳しく調べる必要があるであろう。

また、もう一つの課題は、L1の影響を調べる場合に用いられる基準である。先行研究では、L1とL2で一致しているかどうか、あるいはL1に直訳できるかどうかを基準に用いられ、具体的には複数の英和辞書に記載されている意味で用いられていれば「一致している」・「直訳可能である」と見なされることが多い。しかしながら、個々の名詞や形容詞といった語彙を示されて学習者がどのような日本語訳を思い浮かべ、その結果英語と一致していることになるのかは個々の学習者(の語彙力)によって異なるはずである。したがって、研究者がいくら慎重に「一致するかどうか」あるいは「直訳できるかどうか」を区別しようとしても限界がある。個々の学習者の直訳を考慮する必要があるであろう。

本研究ではこうした課題を念頭に置き、日本人英語学習者のANコロケーションの理解にL1の影響が見られるのかを検討することにする。

2 実験

2.1 研究課題

本研究の具体的な研究課題としては下記の2つを設定する。

- (1) i. L2英語のAN結合の理解に関して、L1日本語の影響が見られるのか。
- ii. L2英語のAN結合の理解は英語熟達度と関連があるのか。

2.2 参加者

日本人英語学習者24名と統制群として英語母語話者24名が実験に参加した。学習者は新潟県内の大学に通う大学生および大学院生で、24名(男性16名、女性8名)の平均年齢は23.08(標準偏差:3.26)、英語学習平均年数は11.33

年（標準偏差：3.56）であった。一方、英語母語話者（男性18名、女性6名）の平均年齢は35.83歳（標準偏差：14.58）であった。日本人英語学習者には大学での授業後に調査の内容、個人情報の取り扱いについて説明し、口頭で同意を得た上で実験への参加を依頼した。英語母語話者に関しては、知人を通して協力を依頼し、同意を得た。

2.3 方法

日本人英語学習者は英語熟達度テストと和訳を伴った容認性判断タスクに参加した。どちらも、問題が印刷されている紙が手渡され、それに記入する形式で一斉に取り組んだ。英語母語話者は和訳なしの容認性判断タスクに参加した。英語母語話者とは個別にメールで文書のやり取りを行った。

英語熟達度テストは、Educational Testing Service (2005, 2007, 2008, 2009) を基に、TOEIC のリーディング・パートを用いて作成した。総問題数は20問で、産出したクロンバックの α 信頼性係数が.59であったため、値を下げる要因となっていた3問を削除し、新たに計算し直した。その結果、クロンバックの α 信頼性係数は.68となり、作成したテストは一応の信頼性を持っていることが分かった。学習者の英語熟達度テスト（17点満点）の平均は11.17点（標準偏差：3.01）であった。

容認性判断タスクでは、(2)のような4タイプのAN結合を含むテスト文を作成して使用した。参加者には、形容詞（下線部）が後に続く名詞とうまく繋がっていて容認可能となるかどうかを判断し、「容認可能」と「容認不可能」の2つの選択肢から選んで回答してもらった。

(2) A：一致コロケーション

(例) Lucy showed me a round stone found on a beach.

B：不一致コロケーション

(例) Mr. Wood runs a casino and earns a handsome salary.

C：一致非コロケーション

(例) ??The famous rock band heard yellow voices from their fans.

D：不一致非コロケーション

(例) ??We made a bitter plan for our trip in February.

Aは、round stoneといったANコロケーションを含むものであり、「丸い石」のように日本語に直訳可能である。Bもまたhandsome salaryといったANコロケーションを含んでいるが、日本語に直訳すると「ハンサムな給料」のように不自然なものとなる。Cは、yellow voices といったAN結合を含んでおり、日本語に直訳可能であるが（「黄色い声」）、英語では不自然であり、コロケーションでもない。Dは、Cと同様に、英語では不自然で、コロケーションでもないbitter planのようなAN結合を含んでいるが、日本語でも直訳不可能で（「苦い計画」）、不自然なものとなる。

AとBのテスト文のANコロケーションに関しては、McIntosh, Francis, and Poole (2009) に掲載されているものを使用した。また、AとCのAN結合に関しては、想定した日本語訳はあくまで一例に過ぎないものではあるが、全て相互情報量 (mutual information, 以下MI) を算出し、3以上のもの、つまり日本語では頻度が高くコロケーションと見なせるものであることを確認した¹。

4タイプのテスト文それぞれ5つと、フィラー文3つを加えた合計23文をランダムな順番で提示した（テスト文に関しては資料1を参照）。また、各刺激文は全て10単語で構成されるよう長さを調整した。

なお、容認性判断タスク終了後、日本人英語学習者にはPart IIとして、容認性判断タスクで使用した全ての形容詞と名詞を1つずつランダムに並べ替えて提示し、和訳してもらった。複数の訳が思い浮かんだ場合には、複数記入してもらった。また、形容詞と名詞は全てその前に定冠詞のtheを付け、形容詞の場合は、名詞等他の用法も可能なものが含まれるため、さらに名詞が後続することを「～」を用いて示した。

¹MIは、元は語と語の連想関係 (association) を測定する指標であったが、共起関係にも適用され、コロケーションの指標として使われている (Church & Hanks, 1990; Church, Gale, Hanks, & Hindle 1991)。2つの語のMI, すなわち $I(x; y)$ は、(i) の式によって求められ、3以上がコロケーションの目安とされる (Hunston, 2002, p.71)。

$$(i) I(x; y) = \log_2 \frac{P(x, y)}{P(x) P(y)}$$

日本語のMIを算出するために本研究で用いたコーパスは、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所と文部科学省科学研究費特定領域研究「日本語コーパス」プロジェクトが開発した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ: Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese) である。

2.4 予測

まず、英語母語話者は、AとBのテスト文のAN結合は全てコロケーションであるため、どちらも容認可能と判断するはずである。一方、CとDのテスト文のAN結合はコロケーションでもなく英語では不自然なため、どちらも容認不可能と判断するはずである。次に、日本人学習者に関しては、L2英語のAN結合の解釈にL1日本語が影響を与えるのであれば、まずAのテストのAN結合は英語のコロケーションであり、日本語訳でも自然なため、容認可能になるはずである。Bのテスト文のAN結合は、英語ではコロケーションであっても、日本語に訳すと不自然なため、誤って容認不可能と判断され、Aのテスト文のAN結合と比べて容認度が低くなると予測される。CとDのテスト文のAN結合は、どちらも英語のコロケーションではなく不自然なものであるが、Cは日本語に直訳可能なため、誤って容認可能と判断される可能性がある。一方、Dは日本語に直訳不可能なため、正しく容認不可能と判断され、Cと比べて容認度は低くなるはずである。したがって、英語母語話者と日本人英語学習者の予測に関しては、BとCの容認度に違いが顕著に現れるはずである。

次に、英語熟達度に関連した予測を述べる。英語のAN結合の理解と英語熟達度との間に関連があるのであれば、AとBのテスト文に含まれるAN結合はいずれも英語のコロケーションであり、自然なものであるため、日本人英語学習者はどちらも英語熟達度のテストのスコアが上がるにつれ、容認度も高くなる可能性がある。ただし、AとBの間で母語の影響により容認度に差が生じ、Bは、学習者の英語熟達度が上がり容認可能性も上昇するという相関が認められたとしても英語母語話者の判断とは依然として大きな隔たりがあるはずである。一方、CとDのテスト文に含まれるAN結合は、AやBとは異なり、いずれも英語のコロケーションではなく、不自然なものである。そもそも習得の際のインプットにも含まれていないと考えられる。しかしながら、英語熟達度が上がると、英語での適切な言い回しを知っている可能性も高くなることから、容認度もある程度下がると考えられる。ただし、Cは和訳可能なため（すなわち、日本語では意味が通じるため）学習者が適切に排除するのは困難で、Dと比べて英語熟達度が上がり容認度も下降するという相関は見出し難いと考えられる。

2.5 データ分析

本研究では、英語のAN結合が日本語に直訳可能であれば、一致すると見なし、日本語に直訳不可能であれば一致しないと見なし。日本語への直訳可能性は、個々の学習者によって異なる可能性があるという前提で、日本人学習者に関しては容認性可能判断タスクの後に行った和訳の結果を基にデータ分析を行った。

具体的には、まず、各テスト文のAN結合に対応する形容詞と名詞のうちどちらか一方でも訳が記入されていなかった場合は、学習者が記入し忘れたという可能性の他に単語の意味を理解していなかった可能性もあるので、当該のAN結合に関する容認性判断はデータから取り除いた。

AN結合の日本語訳として想定した直訳が形容詞と名詞それぞれの訳として示されていた場合には、他に想定外の直訳も示されていたとしても、当該のAN結合に関する容認性判断は有効とした。しかしながら、示された訳が、誤訳を含めて想定外のものしか記入されていなかった場合、そのAN結合の容認性判断はデータから取り除いた。想定外の訳としては、例えば、タイプAのround stoneのroundに対する「その回、その試合」という訳が挙げられる。この2つの訳は同じ学習者が書いたものであるが、どちらもroundの直訳としては想定外で、他に「丸い」といった想定した訳は確認できなかった。また、タイプBのwild ideaのwildに関して、「大たんな」という適切な訳を記入した学習者もいたが、想定した直訳は併記されていなかったため、このAN結合の容認性判断もデータから除外した。

2.6 結果と考察

2.6.1 L2英語のAN結合の理解における母語の影響

表1は、日本人英語学習者と英語母語話者の容認性判断タスクの結果で、AN結合のタイプ毎の平均容認度と標準偏差を示したものである。

まず、英語母語話者の結果は、タイプAとタイプBの容認度が高く、タイプCとタイプDの容認度が低かった。日本人学習者に関しては、タイプAの容認度が最も高く、タイプC、タイプB、タイプDの順に容認度が低くなった。個別に見てみると、タイプBのhandsome salaryとstrong letterが平均容認度が.20、.29とかなり低く、タイプCのwhite breathの平均容認度が.91とかなり高い結果となった（個別のAN結合の結果に関しては資料2を、個人の結果については資料3を参照）。

L1日本語の影響を調べるため、2(群)×4(AN結合のタイプ)の分散分析を行った。分析の結果、交互作用が1%水準で有意であった($F(3,138)=36.04, p<.01$)。

表1 英語のAN結合の平均容認度と標準偏差 (N=48)

	AN結合のタイプ	M	SD
日本人英語学習者 (n=24)	A 一致コロケーション	.92	.14
	B 不一致コロケーション	.47	.22
	C 一致非コロケーション	.61	.25
	D 不一致非コロケーション	.17	.15
英語母語話者 (n=24)	A 一致コロケーション	.98	.06
	B 不一致コロケーション	.85	.16
	C 一致非コロケーション	.28	.21
	D 不一致非コロケーション	.13	.17

そこで、コロケーションのタイプ別に群の単純主効果を分析したところ、タイプAが5%水準で、タイプBとタイプCが1%水準で有意であった(タイプA: $F(1, 46)=4.49, p<.05$; タイプB: $F(1, 46)=46.12, p<.01$; タイプC: $F(1, 46)=25.34, p<.01$)。

Bonferroni法を用いた多重比較の結果、日本人英語学習者も英語母語話者もタイプAがタイプB、タイプC、タイプDより、そしてタイプCがタイプDより平均容認度が高かったが、タイプCとタイプDに関しては、日本人英語学習者ではタイプCがタイプBより平均容認度が高く、英語母語話者では逆にタイプBがタイプCより平均容認度が高かった(日本人英語学習者: $MSe=.03, p<.05$; 英語母語話者: $MSe=.03, p<.05$)。

群別にコロケーションのタイプの単純主効果を分析したところ、日本人英語学習者と英語母語話者のどちらにおいても、1%水準で有意であった(日本人英語学習者: $F(3, 138)=80.32, p<.01$; 英語母語話者: $F(3, 138)=146.22, p<.01$)。

表1の結果及び統計分析の結果は、日本人英語学習者と英語母語話者とはタイプBとタイプCの容認度に大きな違いがあることを示しており、2.4節の予測通りの結果が得られたことになる。したがって、日本人英語学習者は母語の影響によりタイプBのAN結合の容認に、そしてまたタイプCのAN結合の排除に、困難を示したと考えられる。

先行研究と比較すると、全体としてはVNコロケーションに関するMurao (2004)とKoya (2005)の結果と類似の結果が得られたことになる。また、本研究のタイプAとタイプBに関しては、ANコロケーションも含めて調べたYamashita & Jiang (2010)の結果と合致するものとなった。

2.6.2 L2英語のAN結合の理解と英語熟達度

日本人英語学習者の英語のAN結合のタイプ毎の容認度と英語熟達度テストのスコアとの相関係数を算出した結果、英語熟達度テストの点数とタイプBの容認度との間に $r=.42 (p<.05)$ と弱い正の相関が見られた。また、タイプAとタイプDの間に $r=-.59 (p<.01)$ と中程度の負の相関が見られた。したがって、本研究で熟達度との相関が認められたAN結合はタイプBのみであった。このタイプBに関しては、前節のhandsome salaryとstrong letterといった個別の結果からAN結合によってばらつきも大きいと考えられるが、熟達度が高いと容認度も高いと言える。

一方、タイプCに関しては熟達度との相関は確認されなかった。一因として、熟達度が上がってもこの種のAN結合は排除が困難である可能性がある。もともとタイプCは産出される潜在的な可能性を秘めており、熟達度との相関が得難いものだとすると大変興味深い結果であるが、この点に関しては今後の研究課題として引き続き検討を重ねる必要があるであろう。

3 結論と教育的示唆

本研究では、まず、日本人英語学習者は特にタイプBを容認すること、そしてタイプCを排除することに困難を示し、英語母語話者の理解とかなり異なることが判明した。したがって、L2英語のAN結合の理解にL1が影響を及ぼしていることが示唆された。また、AN結合の理解と英語熟達度との関連に関しては、タイプBと英語熟達度との間に弱い相関が示された。個々のAN結合によって理解にばらつきも見られたが、日本語と一致しないANコロケーションに関しては英語熟達度が上がると容認度も上がると考えられる。

最後に、本研究の結果から日本人英語学習者の教育現場での指導に関して示唆されることを挙げてみたい。日本人英語学習者がタイプBのコロケーションの容認とタイプCのAN結合の排除に困難を示したということは、日本人学習者への指導を考えた際にもそこが彼らの学習を支援する重要な課題とも言えるであろう。本研究で調べたAN結合のうち、タイプBのhandsome salaryとstrong letterは、それぞれ単語レベルではそれ程難しいものではないはずであるので、インプットとして加え、学習する機会を設ける必要があるであろう。また、日本人英語学習者のコロ

ケーションの習得に関しては、新語を既知語と共に示した方が意味の保持率が高いことが明らかになりつつあるので (Kasahara, 2011), 形容詞か名詞の部分を開く空所補充の問題を作成するといった方法も考えられるであろう。

一方、タイプCのwhite breathのようなものは、「息が白い」は英語でどう表現するかを考えさせる機会を設け、学習者にうまく表現できないことに気付かせ、学習につなげるといったことも可能であろう。

以上、いくつか母語の影響を考慮した指導として考えられることを挙げてみたが、工夫次第でそうした指導は学習者の英語に対する興味関心を高めるものとなるであろう。一方、指導の効果について、特に実際にこうした指導が目標のAN結合の習得に結びつくものであるかという問題については、今後の研究で追求すべき重要な研究課題となるであろう。

参考文献

- Church, K., & Hanks, P. (1990). Word association norms mutual information, and lexicography. *Computational Linguistics*, 16, 22-29.
- Church, K., Gale, W., Hanks, P., & Hindle, D. (1991). Parsing, word associations and typical predicate-argument relations. In M. Tomita (Ed.), *Current issues in parsing technology*. Dordrecht, The Netherlands: Kluwer Academic Publishers.
- Educational Testing Service. (2005). 『TOEICテスト新公式問題集』. 東京: 大日本印刷株式会社.
- Educational Testing Service. (2007). 『TOEICテスト新公式問題集Vol.2』. 東京: 大日本印刷株式会社.
- Educational Testing Service. (2008). 『TOEICテスト新公式問題集Vol.3』. 東京: 大日本印刷株式会社.
- Educational Testing Service. (2009). 『TOEICテスト新公式問題集Vol.4』. 東京: 大日本印刷株式会社.
- Henriksen, B. (2013). Research on L2 learners' collocational competence and development: A progress report. In C. Bardel, C. Lindqvist, & B. Laufer (Eds.), *L2 vocabulary acquisition, knowledge and use* (pp. 29-56). Eurosla.
- 掘正広. (2009). 『英語コロケーション研究入門』. 東京: 研究社.
- Hunston, S. (2002). *Corpora in applied linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kasahara, K. (2011). The effect of known-and-unknown word combinations on intentional vocabulary learning. *System*, 39, 491-499.
- Kasahara, K., & Koizumi, R. (2012). Relationship between depth of collocation knowledge and L2 proficiency using the Depth Test of Collocation Knowledge. *Annual Review of English Language Education in Japan*, 23, 329-344.
- 岸田真理子. (2013). 「日本人英語学習者による英語の形容詞と名詞のコロケーションの理解」. 上越教育大学修士論文.
- 近藤崇将・松谷緑. (2013). 「語彙習得におけるコロケーションの重要性」. 『山口大学教育学部研究論叢 人文科学・社会科学』, 63, 203-214.
- Koya, T. (2005). *The acquisition of basic collocations by Japanese learners of English* (Doctoral dissertation, Waseda University). Retrieved from <https://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/.../3/Honbun-4160.pdf>
- 小屋多恵子. (2012). 「英語教育とコロケーション」. 掘正広 (編) 『これからのコロケーション研究』 (pp. 23-60). 東京: ひつじ書房.
- Kurosaki, S. (2012). *An analysis of the knowledge and use of English collocations by French and Japanese learners* (Doctoral dissertation, University of London). Retrieved from: https://repository.royalholloway.ac.uk/file/d65f4c4b-8bac-d738-3735-83b5e5e031a7/8/Shino_K._Thesis_20121015.pdf
- McIntosh, C., Francis, B., & Poole, R. (2009). *Oxford collocations dictionary for students of English*. 2nd edition. Oxford: Oxford University Press.
- Murao, R. (2004). L1 Influence on learners' use of high-frequency verb+noun collocations. *Annual Review of English Language Education in Japan*, 15, 1-10.
- Nesselhauf, N. (2003). The use of collocations by advanced learners of English and some implications for teaching. *Applied Linguistics*, 24, 223-242.
- Parmer, E.E. (1933). *Second interim report on English collocations*. Tokyo: Kaitakusha.
- Phoocharoenkil, S. (2013). Cross-linguistic influence: Its impact on L2 English collocation production. *English Language Teaching*, 6, 1-10.
- Yamashita, J. & Jiang, N. (2010). L1 influence on the acquisition of L2 collocations: Japanese ESL users and EFL learners acquiring English collocations. *TESOL Quarterly*, 44, 647-668.

資料1. テスト文リスト

タイプA：一致コロケーション

- a. Lucy showed me a round stone found on a beach.
- b. My son made new friends on the open campus day.
- c. Most of the national land in Poland is flat land.
- d. That park near the station is surrounded by high walls.
- e. Surprisingly, there are six traffic lanes in this wide street.

タイプB：不一致コロケーション

- a. Mr. Wood runs a casino and earns a handsome salary.
- b. The city governor received a strong letter from his citizens.
- c. After listening to his story, Angela had an easy smile.
- d. This television gave her a wild idea about new project.
- e. Lilly just made a long face on hearing that news.

タイプC：一致非コロケーション

- a. The famous rock band heard yellow voices from their fans.
- b. There is a black rumor that he often steals money.
- c. The experience of living in India gave me fresh surprises.
- d. Jeremy slowly blew out a white breath in the snow.
- e. The blue leaves around here have started changing their color.

タイプD：不一致非コロケーション

- a. We made a bitter plan for our trip in February.
- b. George cut his finger and soft blood ran from it.
- c. Bill often uses narrow words for Lloyd to stop him.
- d. He fell in love with Stella, who has small hair.
- e. Kevin's parents bought him a dark bed as a present.

資料2. 個々のAN結合の結果

タイプ	AN結合	M	SD
A	round stone	.96	.21
	new friend	1.00	.00
	flat land	.96	.21
	high wall	.79	.41
	wide street	.88	.34
B	handsome salary	.20	.41
	strong letter	.29	.46
	easy smile	.52	.51
	wild idea	.70	.47
	long face	.73	.49
C	yellow voice	.54	.51
	black rumor	.55	.52
	fresh surprise	.50	.51
	white breath	.91	.29
	blue leaf	.52	.51
D	bitter plan	.42	.50
	soft blood	.00	.00
	narrow word	.12	.33
	small hair	.04	.20
	dark bed	.25	.44

資料3. 日本人英語学習者の容認度 (%) (個人の結果)

参加者	タイプA		タイプB		タイプC		タイプD	
1	4/5	(80%)	2/5	(40%)	2/4	(50%)	2/5	(40%)
2	5/5	(100%)	3/4	(75%)	2/2	(100%)	1/4	(25%)
3	5/5	(100%)	3/5	(60%)	3/5	(60%)	1/5	(20%)
4	4/5	(80%)	4/5	(80%)	3/5	(60%)	1/5	(20%)
5	5/5	(100%)	3/4	(75%)	3/5	(60%)	2/5	(40%)
6	5/5	(100%)	2/5	(40%)	1/5	(20%)	0/5	(0%)
7	2/5	(40%)	3/5	(60%)	3/4	(75%)	2/4	(50%)
8	5/5	(100%)	3/5	(60%)	2/5	(40%)	1/5	(20%)
9	5/5	(100%)	4/5	(80%)	3/5	(60%)	1/5	(20%)
10	4/5	(80%)	4/5	(80%)	3/5	(60%)	1/5	(20%)
11	5/5	(100%)	2/5	(40%)	4/4	(100%)	0/5	(0%)
12	5/5	(100%)	4/5	(80%)	5/5	(100%)	0/4	(0%)
13	4/4	(100%)	2/4	(50%)	2/4	(50%)	0/5	(0%)
14	4/5	(80%)	1/5	(20%)	3/4	(75%)	1/4	(25%)
15	5/5	(100%)	2/5	(40%)	2/4	(50%)	0/4	(0%)
16	4/5	(80%)	2/5	(40%)	2/4	(50%)	2/5	(40%)
17	5/5	(100%)	1/5	(20%)	4/4	(100%)	0/4	(0%)
18	4/5	(80%)	1/4	(25%)	2/4	(50%)	0/5	(0%)
19	5/5	(100%)	1/5	(20%)	3/4	(75%)	1/5	(20%)
20	4/4	(100%)	1/3	(33%)	3/4	(75%)	0/5	(0%)
21	5/5	(100%)	1/5	(20%)	0/3	(0%)	0/5	(0%)
22	5/5	(100%)	2/5	(40%)	2/5	(40%)	1/5	(20%)
23	4/5	(80%)	2/5	(40%)	4/5	(80%)	1/4	(25%)
24	5/5	(100%)	1/5	(20%)	2/5	(40%)	1/5	(20%)

L1 Influence on the Comprehension of English Adjective Noun Collocations by Japanese Learners

Miyuki NOJI* and Mariko KISHIDA**

ABSTRACT

This study examined whether the comprehension of English adjective noun (AN) collocations by Japanese adult learners can be affected by the native language (L1) and whether it correlates with English proficiency. The second language (L2) data from an acceptability judgment task and a proficiency test showed that the learners of English, unlike native speakers, showed a great difficulty in accepting AN collocations incongruent with Japanese and rejecting congruent AN non-collocations (i.e., unnatural AN combinations). Furthermore, a significant positive correlation was found between the results of the incongruent AN collocations and the English proficiency, although the acceptance rate varied between them. These findings suggest that the comprehension of AN collocations in L2 English is influenced by the learners' L1, and that it is partly related with the learner's L2 proficiency.